大阪市立大学生活科学部紀要・第38巻（1990）

「風景構成法」に関する研究（その2）
－ロールシャッハテストとの関連－

弘田洋二 ・ 三船直子 ・ 原　志津 ・ 岩堂美智子

A Study of "The Landscape Montage Technique" (NO.2)
－Relationships between L. M. drawings and the Rorschach Test－

YOJI HIROTA, NAOKO MIHUNE, SHIZU HARA and MICHIKO IWADOH

はじめに

前報[1]では，大学2年生の女子に制作を依頼することによって，風景構成法による描画と箱庭作品との関連を探った。同一個人によって作られた，両技法による作品の印象を評定することにより，内的な表象世界の表現の異同について，またそこから，技法がもつ特徴について考察した。さらに，箱庭療法の適用決定において，風景構成法を利用することができるのではないかという点に関する妥当性についても示唆的な結果を得た。風景構成法が、箱庭にヒントを得て考案されたものであり，表現にみられる共通点，相違点について触れられていることがどういう背景をもっているのかを考えるうえで，この作業は興味深かった。いっぽう，これら非言語的な表現行為についての，実証的な研究の数は少なく，的を絞るための枠組が少ないもの同士の比較であり，明確な仮説の設定が困難であった。風景構成法という非言語的な手法による表現行為にみられる諸特徴の意味を考察し，それらについて仮説を作って行くためには，より検査的な拘束力が強く，すでに多くの仮説が実証されている心理検査の結果と比較することも必要であると思われた。

ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと記す）は，臨床場面において最も多く利用されている検査の一つであり，一回の検査での情報量が豊富である。また，多くの研究者たちによって様々な形式の研究がなされており，解釈仮説も整備されていると言える。風景構成法の基礎的な研究の一環としても，ロ・テスト結果との比較は，風景構成法にみられる特徴を意味付けて行くうえで役立つものと思われる。

なんらかの表現行為は，その生成過程において体験される感覚や感情などの心理的な状態の影響を受ける。ロ・テストにおいて色彩ショック，濃淡ショックといわれるような，さまざまに解釈のうえで取り上げられる問題も，反応生成の過程での体験がもたらす影響に注目したものに外ならない。しかし，一般に，自発的な表現行為においては，表現されるものはあらかじめイメージされており，画面に描いたからといってそれが不意に，描くものを揺さぶるような形で飛び込んで来ることはない。それは，精神内界にあるイメージを表出することと，外界にあるものを認知，同定する作業がもたらす感情，感覚の決定的な相違である。多くの場合，自発的になされる表現は，意識的な緊張の度合が少なく，より無意識的である。そこでは，現実検討のもつ拘束力には緩みが生じがちであり，自我親和的な感覚が伴われていよう。自発的な表現，創作過程自体が，現実と幻想との中間領域においてなされていることである。ロ・テストは，その意味では，自由性と課題性の中間的な領域に位置しているが，自発的な創作や表現におけるよりも現実の側の及ぼす力が強い場においてなされる。そして，そこでの体験の在り方を問うものであると言える。

ところで，箱庭作品との対比をとおして取り上げたように，風景構成法には，技法上，いくつかの特徴がある。例を挙げれば，課題性の強さであるが，他の描画による心理的検査と異なっているのは，風景という課題であることのほか，課題アイテムが多いのに，あらかじめそれらの各アイテムについては知らされていないという状況である。また，サインペンによって構成を行った後に，彩色を促すという，二つの過程をもつことも大きな特徴である。そのほかにも，「川」という構成上の困難をもたらす課題から始まることも，サインペンのため訂正が困難であることと相俟って，課題遂行に影響を与える。このような特徴は，自由画と異なり，描く者に緊張や幻滅を味あわせ易い。実際に，「川」の後に「山」という課題が与えられるとき，「どうして…」という抗議を聞くことも稀ではない。ここでは，失敗や困惑に耐えながら，次に来る課題に対しての準備をしつつ，構成を完成

することが要求されている。こういう課題遂行は，自由画のように，あらかじめイメージを用意したり，自分流の処理の仕方への耽溺を制限するので，いわば，自我機能の働きを目の当たりにするというところがあろう。そのような作業の後での彩色には，多分に自由に，自然，風景，各課題アイテムへの内的感覚が投影されて行くという面が認められる。自然のもつ「くつろぎ」や，それが誘う感情が投影されないと，塗り絵的で，単純な色彩になったり，あまりにひとりよがりになり，自然な感覚から離れると，奇妙な色彩をもつ絵となったりする。

ロ・テストにおいても，自分のした認知をさらに自らの内側に手繰り寄せて，自分にとって意味深い内的世界が投影されることも少なくない。しかし，本来の刺激は，あくまで曖昧なものなので，刺激によって喚起された感情，感覚，それに対する防衛の如何は，さまざまである。一つのカードに対しても，ある人は快感覚を刺激され，良いイメージを投影し，またある人は感情的に中立的に，またある人は，逆に不快で，脅威的な空想を掻き立てられたりする。理論的には，各カード，各部分に対して，そのような結果が起こり得る。ロ・テストは，被験者が対象に対して抱く，良いイメージも悪いイメージも，ほとんど同じように引き出すように出来ている面がある。しかし，風景構成法で描かれる対象は，自然の景色であり，それ自体は，基本的に心の休まる領域に触れるよう促している。構成とは，意識レベルでの緊張を要求し，判断と励まし，なだめるという側面の強い，コントロールという自我機能の総括の中で，内的イメージを検索し，描き出す作業である。それは，外的な対象に向かうことによって起こる不安や恐怖といった情緒的な負荷を帯びた状況での活動ではない。風景構成法の実施が，急性期にある分裂病の患者にも危険でないと言われる[2]のは，このような側面においてと思われる。いっぽう，ロ・テストでは，自我機能の働きを脅かす情緒の中で，それを否認したり，反動形成に向かうような病理的な傾向を抑えたり，緩和して，認知，現実検討の能力を保持するように，自我が働くことが期待される。それが，情緒的負荷の高い刺激に対しても，解放された，自由な反応をする基礎になると考えられる。

したがって，ロ・テストと風景構成法で測られる自我機能は違う性質のものであること，また，表現されるものが，その根とする体験領域が異なっているといえるのではあるまいか。そうであれば，類似したロ・テストプロトコルをもつ被験者の風景構成法は，必ずしも類似したパターンをもつとは期待しがたいことになる。しかし，それでも，具体的には，ロ・テストの各サインと風景構成法の特徴との関連について，興味のある疑問は数多い。最も単純な例を挙げれば，風景構成法においての彩色の豊かさとロ・テストの色彩反応との間に関係がみられるのか，構成の良しあしが，形態水準と関係しているだろうか等である。

目　　的

同一被験者における，初回時の風景構成法による描画（以下LMと略す）と，ロールシャッハテスト（以下RTと略す）を比較し，その関連を明らかにする。

方　　法

1．被者験　大阪市立大学学生（2回生女子）37名

2．手続き

(1)　風景構成法は，あらかじめ黒のサインペンで枠づけしたA4の画用紙を用い，集団場面において実施した。「川，山，田，または畑，道，家，木，人，花，動物，石または岩，最後に描きたいものを何でも」という順に課題を与え，これらの全アイテムを被験者がサインペンによって描き終えた後，クレヨン（20色入り）を与え彩色してもらった。

(2)　RTは，個別に実施した。検査者は，筆者らの他，臨床心理学専攻の大学院生である。なお，スコアリングはクロッパー法に依った。

3．実施期間

1987年度・1988年度・1989年度の5月－9月に実施。

表1．(1)　風景構成法分析項目一覧

○印は有意な対応がみられたものである

第1カテゴリー
〈構成の特色〉
1　羅列型
②　一部過大・大小の歪み
③　視点が一定しない
4　サインペン段階での画面全体の構成収縮
⑤　サインペン段階での画面全体の構成拡散
⑥　中景・小景群の近景化
7　枠からのはみだし
〈色　彩〉
8　課題アイテムだけを塗るもの
9　混色有り
10　筆圧強
11　ヘテロクロマティズム
12　課題アイテム以外に塗り残しが有る

4．整理の方法

(1) ＬＭを構成の特色，色彩，課題アイテムの特徴，印象評定など計72の分析項目に従って分類する。なお印象評定の項目は,前報で用いたＳ－Ｄ法評定の中からクリアに評定し得るものを取り出し，筆者４名全員一致したもののみを採用した。（表１参照）

(2) ＲＴを，計27の分析項目に従って分類する。各サインにおけるカッティングポイントは，臨床的な見地から有意味であると考えられる数値を基準にした。（表２参照）

(3) ＬＭとＲＴの諸特徴に関連がみられるかどうか，χ^2検定を試みる。

結　　果

1．ＲＴとＬＭとの間に有意な対応関係がみられたものについて

結果を整理するにあたり，ＬＭの分析項目を以下の三つのカテゴリーに分けた。第１カテゴリーは構成，彩色に関するもの，第２カテゴリーは課題アイテムの描画の特徴，第３カテゴリーは印象評定である。

表１．(2)

第２カテゴリー	
〈 川 〉	〈 人 〉
1　此岸のない川	28　複数の人
2　とぎれる川	29　記号化
3　上流末端処理の失敗	30　2人以上の相互関係が示唆されるもの
4　大きく急な流れ	31　ＨＴＰ羅列有り
5　護岸	32　顔のない人
〈 山 〉	㉝　ＨＴＰ の遠景化
6　単　山	34　歩く人・立つ人（運動）
7　背景としての安定を欠くもの	35　寝る人・座る人（姿勢）
8　山　道	36　働く人
9　茶色で着色された山	37　遊ぶ人
10　稜線越え	38　道具を持って立つ人
11　急峻な山	39　道の上に立つ人
〈 田または畑 〉	〈 花 〉
⑫　境界のはっきりしない田	40　一輪のみ
13　小さい田（1／10以下）	㊶　大きい花
14　広い田（1／3以上）	〈 動物 〉
15　働く人がいる	42　動物の方が人間より大きい
〈 道 〉	43　鳥
16　途切れる道	44　魚
17　山道のみ	〈 石または岩 〉
18　川で途切れる道	㊺　大きな石または岩
19　宙にうく道	46　道の上の小石
〈 家 〉	47　道しるべの石
20　窓も入口もない	〈 付加物 〉
21　家と田が対岸にある	48　橋
22　壁面処理の失敗	49　太陽
23　はみだした家	50　光線
〈 木 〉	
24　家から遠い木	
25　山の上の木	
㉖　針葉樹	
27　枯れ木	

表１．(3)

第３カテゴリー
〈印象評定〉
1　気持ち良い
②　気持ち悪い
3　丁寧な
④　雑な
5　男性的
6　女性的
⑦　豊か
8　貧弱
9　動的な
10　静的な

表2．ロールシャハテストの分析項目一覧

1	W％80以上	⑮	RC有り
②	dr有り	16	F（－）有り
3	main S 有り	17	A％60以上
4	反応数25以上	18	H＋A:Hd＋Ad＝2：1 におさまる
5	T／R 30秒未満		
⑥	M3以上	19	H＋Hd＜(H)＋(Hd)
7	M＜FM	⑳	F,V.3以上
8	付加を含む m 3 以上	㉑	cloth の無い人
9	T&Y，V有り	22	A obj の無い人
10	sum C 3以上	23	8・9・10 card％30以上
11	FC≧CF＋C	24	Org. Ability 3以上
12	F（＋）％70以上	25	F（pm）％30以上
13	H ％40以上	26	p の数 3以下
⑭	H％20未満	27	d 有りの人

(1) 第1カテゴリーにおいて関連がみられるもの

・RC（カード回転）をした者22人中，構成において「視点が一致しない」ものは12人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・FV（正面向きの顔）を三以上出した者16人中，構成において「画面全体の構成拡散」（サインペンでの描画段階で，画面全体にわたって風景が構成されておらず，課題アイテムが画面の隅，端に拡散）がみられる者は9人で両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・disharmony（結合反応において，調和のとれない，もしくはやや奇異な印象のある結合）を出した者7人中，「一部過大，大小関係の歪み」を示した者は4人で，両者の間に有意な対応が見られた。（P＜0.05）

（表－1（1））

(2) 第2カテゴリーにおいて関連がみられるもの

・M（人間運動反応）が3未満であった者6人中，「田または畑」のアイテムにおいて，「境界のはっきりしない田」を描いたものは4人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・F．V．3以上を示した者16人中，「木」のアイテムにおいて，針葉樹を描いたものは，8人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・dr のある者12人中，「花」のアイテムにおいて「大きい花」を描いたものは7人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・H％20未満であった者13人中，「石または岩」のアイテムにおいて，「大きな石（岩）」を描いたものは5人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.01）

(3) 第3カテゴリーにおいて関連がみられるもの

・cloth(衣服反応）を出さない者5人中，印象評定において，「気持ち悪い」と評定されたものは5人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・RC（カード回転）をしたもの22人中，印象評定において「雑な」と評定されたものは，12人で両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

・dr（異常部分反応）を出す者12人中，印象評定において「豊か」と評定されたものは5人で，両者の間に有意な対応がみられた。（P＜0.05）

考　　察

1．LM－RT間に統計的に有意な対応関係がみられたものについて

(1) M＜3に関して

ロ・テストにおいてMに与えられている人格の特性は非常に幅広いが，人間的な運動感覚に親和性がない，同一視が十分働かない，あるいは運動感覚を表現するに値する重要な体験の要素として取り上げないなどのために，体験の幅が狭まっているような状況において，Mは減少する。そのような意味で，Mは，共感性，想像力，創造性，自己受容性，自発性などの指標となると考えられてきた。今回RTとLMとの間に得られた対応が，M反応をとおして仮定されるどのような人格特徴に関係しているのであろうか。

（表－1(2)）

ＬＭにおいて，「田，または畑」という課題アイテムは，「川」「山」の次に出る，３番目の，比較的大きく描かれることが期待されるアイテムである。しかし，「川，山，道」というアイテムとは異なって，画面の端から端までを貫いて描かれることが必ずしも自然なことではない。その意味では，「田」を描く際の領域の設定，大きさ，境界を明示することは，他のアイテムとのバランスを考えたうえでの自己決定を促す課題となっている。これまで，人格のカルティヴェイトされた部分，社会化との関連というように象徴的な意味のレベルで考察の対象とされてきた[2]が，自我機能の一側面を表すものとしても考えて行く必要があろうか。

風景を描くという条件のもとで，「川」と「山」という大きな自然の構成物のあとに，まだ何を描くように要求されるかが分からない中で，「田」を「これ位の大きさにしても大丈夫だろう」と考えるには，自分の処理能力についての自信，予測性，判断力が必要とされる。それらをひとまとめにして初めて，安定した自己決定，決断が下されているはずであろう。したがって，「田の大きさ」「境界の決定」は，自分への信頼感，自己主張についての安心感などと結び付くものでもありうる。Ｍとの顕在的な関連としては，自発性，自己受容性といった側面が主に考えられようか。

(2)　カード回転に関するもの

ロ・テストにおけるカード回転は，本実験のようにそれを促す教示がない場合には，自由に視点を変えて，いろいろな角度から対象について検討するという柔軟な態度を表すと考えられる。しかし，いっぽう，カードを手渡されてすぐにおこるカード回転は，与えられた場面に協力することへの不快な感情や，自分流のやりかたへの固執，あるいはそれによって保たれる能動的であろうとする態度と関係する。また，あまりに頻繁なカード回転は，対象と向き合うことや自らの生産能力への不安と関わっていたり，自らが対象に能動的に取り組むことなく，動きの中で，刺激の方から認知を受け取ろうとする依存的，受動的な態度を反映しているようにも思われる。このようにカード回転のもつ意味は一様ではない。

ＬＭにおいて「視点が一定しない」というのは，透視法的な視野が一点に保たれていないことによっておこる現象であり，たとえば，田だけが鳥瞰図的に描かれている場合などである。今回，空間の歪みが著しい例は一例のみであったが，視野を一点に保ち続けて，課題アイテムを構成することに失敗する例は多かった。このような構成となる絵は，印象の点では「雑な」と評価され易い。カード回転をする被験者のＬＭが「視点が一定しない」，「雑な」と評定されるという結果はあるが，カード回転をしながら，透視法的な視野が保たれており，雑でもない絵を描いた被験者も半数いることにも注目しておく必要がある。カード回転を動機づけているものが、安定した自発性であるのか、不安や葛藤に彩られた衝動的なものであるのかが，描画の構成に反映されたと考えることができる。いっぽう，カード回転をしない被験者との間にみられる差については，不安，葛藤に対する耐性と関係しているのではないかと思われる。その意味はどうであれ，不動でありうることは，反応することについて，少なくとも焦っていないということでもあろう。それは，忍耐強い処理を可能にする，冷静さの基盤にはなろう。（表－１(3)）

(3)　drに関するもの

ロ・テストのdrについても，カード回転と同様に，両義的な解釈が可能である。良い形態と結び付いているdrは，独創性や自我の強さの指標とされる。いっぽう，drという形で領域を切り取るほどの十分な堆敲を経ない反応，あるいは不良形態と結び付くとき，通常の対象への接近法から偏奇した知覚様式の存在が疑われる。dr反応と対応関係がみられたＬＭの２分析項目は，このdrの両義性を反映しているように思われた。

ＬＭにおいて「大きい花」という分析項目を設けたのは，今回対象とした描画を見ていて，われわれが，奇妙な，あるいは無気味なという印象を受けた絵に，前景に花を大きく描いたものが多かったからである。したがって，drとの対応がみられた「大きい花」が描かれた作品と，「豊かな」と評定された作品は別のものであった。ＲＴにおいてdr反応をした被験者のＬＭは「豊かな」と評定されることが多いと同時に，dr反応をした別の一群では「大きな花」が描かれ，絵の印象は無気味になっていた。

われわれの日常において，花というものは背景に退いて，慰安や休息を与えることが多い。生け花にしても，それを生けるときは，目の前に接近して対象化されるが、そのおかれる場所は，部屋の隅や床の間である。そして，対人場面での緊張から逃れる場，同意，称賛が前提とされるコミュニケーションの橋渡しとして，いわば道具的に脇役を勤めている。花が，視野の中で中心に，あるいは献花として全面に押し出されるとき，悲しみや，別れの意味を担った儀式の場となる。そこで花に課せられた役割は鎮魂であり，忌避すべきもの，悲しいものを不自然なほど美しく飾ることによって，われわれの心を，現実の彼岸に運ぶことであるように思われる。ＬＭにおける「大きな花」に，そのような意味を付与することは必

ずしも妥当ではなかろうが，自然の中で，その土壌，風土の豊かさを暗示するイメージを与える花が，より直接的に近景を大きく飾るとき，描く者の気持ちは花そのものに奪われ過ぎているように思われる。そこには，なんらかの補償的な意味も考えられなくはない。いずれにせよ，dr反応を出すことにつながる，どのような心理的特徴と対応したものであるのかについては，さらに細かくプロトコルの検討を要することでもある。(表－2)

(4) Organization Ability に関するもの

Organization Ability の評価は，阪大法によるスコアリングシステムにおいて用いられている。LMが，一つの，全体的にまとまりのある構成を要求する課題であり，RTにおいて，各々の認知を関連させ，組織的に統合してゆく機能の発揮との関係を調べるのに有用と思われた。org. d. は，2つ以上の認知を，組織的に結合し，関係付けるときに生じる現実吟味の障害を表す記号である。一つ一つの認知は妥当なものであっても，大小関係を無視したり，結果的に現実にはありえないような着想を形成するものである。RTでの org. h. とLMの統合的な構成度が一致するかという関心がもたれた。RTにおける org.d. とLMにおける「大小関係の歪み」との間に対応がみられたが，これらは比較的パラレルな関係を想定し得るものであり，他の対応関係ほどには，考察に際しての複雑さはないと考えられる。

org. d. は，認知的な吟味能力は機能しているが，それに基づいて構成された観念，着想内容の現実性に対するチェック機能が弱いか，あえてそれを不問にすることによって生じると考えられる。ここで問題になるのは，認知の障害ではなく，内的な観念と現実がもつ枠組の重さ，自分にとっての重要性について判断する態勢についてであろう。自分のもった着想，想念にこだわるあまりに現実を軽視する態度は，本来，そこでどの程度葛藤が経験されているかをも考慮する必要があるが，今回はそこまで明確にすることはできなかった。LMにおいて「大小関係の歪み」は，そのような内的な力動関係によって生じると考えられる。

また，LMの「大小関係の歪み」は，RTの w%とも対応する傾向が見られている。w傾向は，著しい受け身的な態度のために，刺激を分節できない場合，D領域に反応できるが，関係づけ，組織化しようという態度などの条件下で強くなる。関係付けに向けての強引な態度によるもののほか，著しく受動的な人は，LMの課題アイテムを簡略化したり省略することができない。そのために，中景，小景が大きく描かれてしまう傾向がある。それは，しばしば全体のバランスを崩すことが観察されている。

(5) H%に関して

LMに表現される「大きな石」については，前報において，箱庭作品との関連においても考察した。圧倒的な力の領域，人の力が無力であらざるを得ないような動かしがたいイメージの体験領域が，個人の内側に意識されていると考えられた。そのような体験は，宗教的な体験，ないし心的な外傷体験と結び付く類いのものであるとも連想される。

RTにおける低いH%と「大きな石」との関連が得られたが，低いH%は，人への関心が制限されており，人に対して親密さや共感をもちにくい傾向を表すと考えられている。意識的，無意識的，好むと好まざるに拘わらず，人を視野に入れにくいという状況では，人への期待，愛着から距離のある，孤独な「ひとり世界」が優勢になっていよう。そこでは，人との共同存在性という世界対応のうえでの安定感の代わりに，手ごたえのある，重い存在のイメージが求められているように思われるが，本研究の，方法的な限界を越える課題であろう。

(6) 衣服反応に関するもの

衣服反応そのものは，自由連想段階で出現することは稀であり，たいていは人間像を明細化する質疑段階において明らかになる。刺激から得られた「人」という着想に，同一視したり，対象化する作用と結び付いている。そこには，人間像を個性的なものとしてとらえようとする視点が働いており，また，そうすることを大事なことと考えて，言語化しようとする姿勢が示されている。その過程で働く感情が陽性のものであれ陰性のものであれ，具体的で身近な，いきいきとしたものとして人間像を感じていることを反映してもいる。

衣服それ自体は，近年めざましく，われわれにとって日常生活で欠かせないものとなってきており，個性を表現し，自分を外に対して明らかにして行く手段としての意味を担っている。着る服を選ぶという行為には，そのひとの生き方，考え方，自分に対する判断，評価，いわゆるTPOを通じての社会生活に対する態度，価値判断などさまざまな要素が含まれており，社会的な接触への能動的な意志が働いているはずである。もちろん，衣服反応を自我境界との関連で把握しておくことも重要であろうが，対人接触への感受性という観点も加味しておく必要があろう。

LMにおける「HTPの遠景化」は，生活空間が，描者にとって遠ざかって体験されていると考えられる現象であり，いっぽう，中，小景群が近景に出てくる現象は，視野の狭まり，微小なことへの選択的な注意，こだわ

りなどを表すとされる。前者は，分裂病の破瓜型，後者は妄想型の特徴として取り上げられたものである[4]。それらは空間体験の様式と考えられ，女子大生で，衣服反応が見られないということは，生活空間の体験の仕方に偏ったものが有り得ることを示唆した。ただ，「ＨＴＰの遠景化」，「中，小景群の近景化」という分析は，あまりに抽象の度合が高いし，その程度，全体の構成，他のアイテムの描き方などを考慮する必要があろう。

衣服反応が出ない被験者のＬＭが「気持ち悪い」と印象評定されたことに関しては，女性としての同一性の感覚につながる問題が示唆されているのかとも考えられる。

(7)　ＦＶに関して

ＦＶは，図版の中に正面向きの顔を知覚するものであり，多くは，「目」や「口」を見ることによって生じる。対人緊張や妄想的な傾向を表すと言われることがあるが，思春期・青年期のＲＴプロトコルでは，かなり頻繁に見られることもある。見られることに敏感な，自意識の強さといったレベルでとらえられることも可能である。ただ，脅威的不安の強さを表していたり，外的刺激が相貌性を帯びるほどの現実吟味の障害を伴っていたり，ＦＶを知覚し易い傾向の病理性の診断には注意を要する。一般には，見られるという感覚によって生じる不安は，人を防御的，緊縮的にさせ，その行動を常識的な範囲の枠内に留める傾向があろう。いっぽう，不安にさらされたとき，そのような防衛が働かず，躁的で，無鉄砲な反応へと駆り立てられる場合も考えられる。そこには，意識的に選び取られた万能的なニュアンスがある場合もあろうし，麻痺的な感覚の中で，動きが起こっている可能性もあろう。

ＬＭにおいて「画面構成の拡散」とした分析項目は，風景の構成が画面の中心部を軸にして行われず，アイテムが画面の隅，端にもって行かれるような，放散的なベクトルをもつものを表している。発達的な研究において，女子大生の特徴として挙げられている[5]「収縮」とは逆の現象を指している。散漫なエネルギーとでも表現したくなる構成の仕方であり，画面に重心がなく，安定感に欠ける構成となる。このような絵の特徴をもつ被験者においては，ＦＶ知覚をさせる不安が，少なくとも描画セッティングの中では，緊縮的な方向に作用していない。むしろ，ＦＶで表されるような不安，あるいはそういう不安を喚起され易い傾向は，緊縮的に，身を小さくするような防衛とは異なった防衛を発達させると考えられる。この防衛は，より原始的なものである可能性が強い。

ＬＭに描かれる「針葉樹」が青年期に多くなる[3]ものであることを考えると，単に発達的な問題として，ＦＶ反応との対応はとらえられて良いのかもしれない。針葉樹は，寒冷地であることを連想させ，広葉樹に比べて，太陽の恵みへの依存度が低い形態をもっている。多分に，自立への指向性と関係しようが，ＦＶ反応の多さと関連するときには，対人関係から受ける圧迫感が強いことが推測され，その自立指向が，他者との暖かい関係を犠牲にして進んでいる可能性も示唆されよう。この研究からだけでは，何とも言えないところである。

(8)　Ａ％に関して

Ａ％＞60は，発想が常同的になり，陳腐な思考に陥りがちな傾向と関連して，知的能力が一定程度ある場合には，不安の強さの指標とされている。不安の中では発想の自由さが失われると，一つのカテゴリーへ，より退行的で，原始的な適応様式に傾きがちになると考えられているが，ＬＭにおいて，石を川の「護岸」機能をもつものとして並べて描く行為がそれ自体は，ある種の常同性を思わせる。護岸は，水が溢れることに象徴される，衝動などに対してコントロール不能に陥る体験に対する防備という側面をもっている。強迫的不安と，それに対する強迫的対応という図式で理解されることもある[3]今回の結果からは，不安の質を限定することはできない。ここでは，どこに石を描いても良いのに，現実の枠組に頼る，あるいは繰り返される行動によって，自由な選択が課す負担が避けられる面に注目しておく。

２．ＲＴ－ＬＭ間に有意な対応がみられなかったものについて

絵画表現とＲＴとの関連について報告した小田ら[6]は絵画に表現される「動き」が，ＲＴプロトコルの，運動反応の増加，絵画の多彩色傾向が，SumC の増加，あるいはＣＦ＞ＦＣなどの指標に対応するという結果を示している。その研究は，臨床像の変化に伴って起こる，ＲＴと絵画表現の変化を観察，分析した結果について述べており，ＲＴと絵画表現がかなりパラレルな関係を示している。今回のわれわれの研究では，色彩反応，運動反応の量，と多彩色，運動表現などの絵画の特徴との間に有意な対応関係は得られなかった。それには，研究対象の違いのほか，小田らの用いている絵画が自由画であり，ＬＭのような課題性の強いものではなかった点も影響しているかもしれない。

その他に，ＲＴの領域使用に関して，有意差はみられなかったものの，mainS と「境界のはっきりしない田」の間に相関傾向があった。 mainS は，図と地を反転させた認知によって生じるが，知的反対傾向として，自我の強さの指標と考えられることもある。また，本来は凝縮したものと知覚され，それを同定することを一義的

に迫ってくるプロットのもつ拘束力が弱まっているわけであり，現実を軽視する，ないしは逃避する傾向とも解される。いずれにせよ，現実的な圧力を「かわす」という心の動きによって生じることが多い。田の描写において，境界を明示しないことは，態度を保留することと結びついていると考えられる。「かわす」，「いなす」というような態度は，積極的に対象に関わってゆくという能動性をもつものではないが，失敗を避けて，安定を保つという調整機能ではあろう。

まとめと今後の課題

同一被験者に試みた「風景構成法」とロールシャッハテストの結果には，どのような関連がみられるであろうか。本報告では，一般女子大学生というノーマルなグループを対象とした両技法の結果をもとに，各々の技法において用いられている解釈の指標から，分析項目として72と27，計99の項目を選び出し，1944組の対応関係の有無を統計的に検討した。

結果を要約すると，ＲＴにおいてＬＭと統計的に対応関係が有ると示唆されるものは，「領域」ではdr，「決定因」ではM，「反応内容」ではＨ%，Front View（正面を向いた顔），cloth（衣服，装飾），その他RC（カード回転），organization disharmonyの各項目であった。また，統計的に有意ではないものの，対応関係がある傾向が認められるものとしては，「領域」のmainSと「反応内容」のＡ%があげられた。

これらＲＴの諸特徴に対応するＬＭにおいては，二つの分析項目が関連するものと１項目のみが関連するものが，ほぼ半数ずつであった。

この対応関係の意味については，臨床事例とは異なる解釈が要請されようが，ここでは被験者である「青年期」女性の，発達上の病理性をも指摘しつつ，かれらの心理的特徴である不安，抵抗，補償作用，感受性の強さ，距離をおいた人間関係，自我機能の動揺などが投影されたものとして考察された。

以上のように，今回私たちが選択した分析項目から見い出されたＬＭとＲＴの対応関係は，予想したよりも少ないものであった。このことは，例えばＬＭにおける彩色とＲＴ色彩反応との間に，パラレルな対応関係が少なかった点にもみられるように，両技法上の差異の影響が考えられる。全体的にも対応関係が見られることが今回少なかったことについては，ＲＴサインの取り上げ方にまだまだ様々な可能性があり，ＬＭ分析項目においても私たちが今回取り上げなかった中に，有効な指標が数多くあったかも知れないと思われる。

また，対象者の性質，対象者一人ひとりの個別的な情報の量にもかかわってくるけれども，ＲＴにおいて被験者一人ひとりの反応の質を問わずに，同質のものとみなして数量的処理したことの短所を越えるだけの，十分な事例的検討を試みなかった点については反省の余地がある。

しかしながら，本報告で得られた知見はささやかではあるが，今後ＬＭにみられる諸特徴の解釈をすすめるにあたって，より客観的に判断していくための指標となりうるであろう。

第二に，数が少なく統計的な研究の結果としてここに挙げるわけにはいかなかったものの，ＲＴにおける特殊な原始的防衛機制（例えば分裂，投影性同一視など）の発動と描画との間に，関係を示唆するような個別的な例がいくらか見られたことをつけ加えておく。

その上で今後の課題としては，１）分析項目の再検討：例えば今回取り上げなかったＲＴサインの選択およびカッティングポイントの検討，また一つずつの項目の対応関係を調べるのではなく，幾つかを群としてまとめ，その群の特徴を何か有するもの同士の対応をみていくなど，２）被験者数をふやし，クロス集計をする，３）事例による検討，があげられる。

終わりに，お忙しい中，統計処理のプログラムを考案して下さいました新平鎮博先生，ご助言ならびにご校閲いただきました氏原　寛教授に心より感謝いたします。

文　　献

１）弘田洋二，小野浩子，森鼻雅代，武田宣子，岩堂美智子：「風景構成法」に関する研究－箱庭作品との関連－，本紀要，36，179－187（1988）
２）中井久夫：精神分裂病者の精神療法における描画の使用，芸術療法，2，77－90（1970）
３）山中康裕編：風景構成法，岩崎学術出版社（1984）
４）中井久夫：描画をとおしてみた精神障害者，とくに精神分裂病者における心理的空間の構造，芸術療法，3，37－51（1971）
５）弘田洋二：風景構成法の基礎的研究－発達的な様相を中心に－，心理臨床学研究　3（2），58－70（1986）
６）小田知子，二宮秀子，徳田良二：絵画療法とロールシャッハ・テストの関連，芸術療法，3，1－12（1970）

（平成２年10月11日受理）

Summary

This study is based on an experiment in which 37 female university students tried the Landscape Montague technique (LM) and the Rorschach Test (RT) for the first time.

The aim of the study was to examine possible relationships between the characteristics of LM and RT.

The results are as follows:

1) dr in Location
2) M in Determinant
3) H%, Front of View & cloth in Content
4) RC & organization disharmony

A meaningful relationship was found between LM and the above-mentioned items.